

## 巻頭言



分子科学研究所は、創立以来の四半世紀、わが国の分子科学発展の拠点としての役割を果たしてきた。21世紀においては、新しい物質の概念を提供しつつ科学技術の広汎な分野に、さらには国の内外にも影響を与える、高等学術機関としての役割をもつべきである。

昨年度から統合バイオサイエンスセンターが発足し、ここに3研究所の研究協力を実施する場が創設された。そのため、新しい研究棟がE地区に建築されつつあり、今年度末の完成を待って研究が開始されることになる。本年度から5年間にわたって東北大学金属材料研究所、高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所、東京大学物性研究所、京都大学化学研究所と本研究所が物理と化学の枠を超えた物性科学の分野開拓を目指して共同研究の試みを開始する。分子科学研究所の内部においても、研究系を超えた共同研究の輪が広がっている。

原子あるいは分子1個を操作し、新奇な構造と物性をもつ物質の創製が可能となった現在、分子の科学と生命科学など他分野との障壁を超えた新しい研究分野が開拓されつつある。そのため、分子科学のあらゆる分野の基盤を担う役割がますます重みを増しており、分子科学の発展の拠点としての分子科学研究所が、その責務を自覚しつつ発展を遂げる責任は重大である。

分子科学研究所の人事が高い流動性をもっていることは、本年度にも11名の分子研の技官、助手の方々が、他大学などの研究機関へ転出されたことに如実に示されている。2年間分子科学研究所の構成メンバーとして研究に推進された流動研究部門の黒澤宏教授、福井一俊助教授および長岡伸一助教授（極端紫外光科学研究系界面分子科学研究部門）が3月31日をもって元の大学に復帰された。3先生の分子科学研究所への御貢献に厚く感謝するとともに今後の益々の御活躍を期待している。さらに分子科学研究所は岡本裕巳教授（分子構造研究系分子構造学第一研究部門）を東京大学から、永瀬茂教授（理論研究系分子基礎理論第一研究部門）を東京都立大学から、さらに木下一彦教授（統合バイオサイエンスセンター戦略的方法論研究領域、分子科学研究所兼務）を慶應義塾大学から迎えた。また、界面分子科学研究部門（流動部門）に、小宮山政晴教授が山梨大学から、奥平幸司助教授が千葉大学から、久保園助手が岡山大学から参加され、研究に邁進されている。

理論研究系の中村宏樹教授は、平成12年度の中日文化賞を、21世紀の化学反応論ともいえる非断熱遷移理論によって受賞された。同じく理論研究系の平田文男教授、分子構造研究系の前客員赤阪健教授は日本化学会学術賞を、本執筆者（茅）が同化学会賞を受賞したことをも報告する。中村、平田、赤阪教授がこれを契機に益々の研究面での発展をされるものと期待し、ここに御祝い申しあげる。

平成13年5月

茅 幸 二